The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	市民参加型劇団の教育力に関する研究
Author(s)	
Citation	令和6（2024）年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2025
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/101251
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式６

申請先学部　　人間科学部　採択番号　No.2

令和６年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふ　り　が　な 氏　　名	ほりかわ　あやね 堀川　彩音	学部 学科	人間科学部 人間科学科	学年	3年
ふりがな 共　同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	藤川　信夫　先生	所属	人間科学部人間科学科		
研究課題名	市民参加型劇団の教育力に関する研究				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				

1.　はじめに

２回生の秋冬学期で受講した「人間変容論Ⅱ」で、演劇ワークショップを通して人間が変化することを学び、演劇の持つ教育的な力に興味を持つようになった。そこで、演劇の持つ教育的な意義をより理解したいという思いから、実際に劇団の活動に参加し、その中でフィールドワークを行いたいと考えた。

本研究では、演劇の活動を通して人々の行動がどのように変化していくのかを明らかにすることを目的とする。また、活動の中での心理的な変化を明らかにすることも目的である。

2.　本研究の特徴

竹内敏晴や平田オリザ等による演劇実践（竹内 1975、蓮行・平田 2016）をはじめとして、これまで演劇がもつ人間形成力については注目されてきた。演劇がもつそうした潜在力への着目から、近年では、例えばコミュニケーション力の育成などの演劇外部の目的を実現するための手段として演劇あるいはその要素を活用する実践的試みとともに、それぞれの実践の成果・効果に関する論文や報告書も数多く見られるようになった（平田・蓮行 2009 等）。それに対して、本研究では、演劇外部の目的ではなく、演劇作品の制作自体を主たる目的とする自由参加型の実践を取り上げる点、また、調査者自らも参加者としてこの実践に加わり実践を内部から観察するとともに他の参加者たちに対してインタビューを行うことで、演劇制作活動に参加したことが結果的に参加者たちにいかなる変化をもたらしたのかを明らかにする点に特徴がある。

3.　調査概要

3.　1.　フィールド先の概要

フィールドワークを行っている劇団Ｘは、毎年一般公募で参加者を募り、8ヶ月から 10ヶ月の稽古を経て、卒業公演後に解散する期間限定劇団であり、参加者の７割以上が初心者で構成されてい

る。「地域間」「世代間」交流を趣旨に関西で 30 年以上活動を行っており、稽古は劇団 X の本体にあたる劇団 Y に所属するスタッフのサポートのもとに行われる。また、卒業公演を終えた参加者は、劇団 X の卒業生で構成される劇団 Z に入団することもできる。

3. 2.　調査概要

筆者は劇団 X で、2024 年 5 月から現在に至るまでの 8 ヶ月間、週に 1 回のペースで参与観察を行い、他の参加者と同様に稽古に参加している。加えて、参加者 6 名と劇団員 1 名に対して、半構造化インタビューを実施した。[1]これ以降、インタビュー対象者は、仮名を用いて記述する。

表 1. インタビュー対象者

対象者	年齢	居住地	本劇団への参加	職業
なおこさん	32 歳以上	関西地区 A 市	2 回目	会社員
さえさん	23~27 歳	関西地区 B 市	はじめて	会社員 →フリーター
ゆきさん	23~27 歳	関西地区 C 市	はじめて	会社員
としさん	18~22 歳	関西地区 D 市	はじめて	大学生
ゆうこさん	32 歳以上	関東地区 E 市	はじめて	専業主婦
かえでさん	18~22 歳	関西地区 A 市	はじめて →2 ヶ月で退団	大学生
劇団員あおさん	48 歳	関西地区 F 市	設立時から	会社員

4.　分析と考察

4. 1.　参加者の多様な参加動機とその変容

インタビューから、入団当初の参加者は、現状に対するネガティブな思いを打破する手段として演劇を捉えており、その後、劇団の空間内でのポジティブな効用を求めて行うものとして演劇を捉えるように変化する傾向があると考えられる。

4. 1. 1. 入団初期の参加動機

参加者の入団に至る動機を整理すると（1）自己表現型、(2）解放型、(3）人間関係型の 3 つに分類できる。各参加者は、どれか 1 つにのみ当てはまるのではなく、いくつかの動機をあわせもつ場合もある。

表 2. 入団初期の参加動機

自己表現型	なおこさん、としさん、かえでさん
解放型	なおこさん、ゆきさん、さえさん
人間関係型	さえさん、ゆきさん、ゆうこさん

(1)　自己表現型

自己表現型とは、演劇を通して自己表現を向上させることを目的とする人である。自己表現型には、なおこさん、としさん、かえでさんが当てはまる。

[1] インタビュー対象者のゆうこさんは、インタビューに加えて文面でのやりとりも含まれている。

なおこさん）
私は本当に最初、劇団にするか、はたまた全然違うものか。 格闘技みたいな、習い事なんかしたいなと思って。格闘技みたいなこともやってみたいような人生の中で一回ぐらいと思って。あとは最後人と話す上での表現の幅を広げたかったから、最終劇団Ｘに来てるんですけど、元吉本の芸人さんがやってるお笑い教室に行こうかなとか、あと元アナウンサーさんがやってる話し方プレゼンテーション教室にしようかなとか結構迷ったんです。やりたいことがいっぱいあって、迷って迷って、劇団Ｘを一つ選んでるんですよね。（下線部筆者、以下同様）

なおこさんは「人と話す上での表現の幅を広げた」いと語っている。ここから、なおこさんは演劇で自己表現の向上を目的としていることがわかる。

としさん）
自分は今もそうなんですけど、人と話すのがすごい苦手、いや苦手じゃないんですけど、めちゃくちゃ上手ってわけじゃなかったのと、あとすごい自分を主張するってのも苦手だったので、得意になれたらいいなと思って、自分を表現するのがすごい苦手だったから、それを表現できるようになりたいなっていうのがあってです。だったら、演劇とかだったらなんかいいかなと思って、それでちょっとやってみようかなっていうふうに思いました。

この語りから、としさんは苦手とする自己表現を「得意になりたい」という思いで入団していることがわかる。

かえでさん）
オケの活動をしている中でちっちゃいソロがあったりして、そういう時に自分の緊張感をコントロールできていないなっていうのが、ずっと自分の中で課題感としてあったっていうのがまず一つで、それを克服するための方法をいろいろ探してはいて、例えば楽器面で楽器の演奏面、技術的なアプローチで言うと、神戸で一人先生に師事して、先生のところに通って個人レッスン受けたりはしてたんですけど、まあそういう精神的なアプローチって、自分でしないとどうにもなんないとこあるかなっていうところで。 まあ、友人から演劇の話をもらって、一個楽器演奏以外の自己表現の場で自分を自己表現することに対する抵抗感をなくすっていうのが一個アプローチとして考えられるのかなって思って入りました。

この語りから、かえでさんは演奏の表現力を向上させるために演劇をはじめたことがわかる。一見すると、上記２名とは異なる参加動機のように思えるが、実生活と演奏という表現を行う現場が異なるだけで、表現力を高めるという目的は３名とも一致しているといえる。

（2）　解放型
解放型とは、仕事と家庭の場で与えられた役割から解放されることを求めて演劇を行う人である。インタビューでは、仕事と家庭のみの生活に感じる不満や物足りなさを語っていた。解放型には、なおこさん、さえさん、ゆきさんが当てはまる。

なおこさん）
人って社会に出て、何らかの役割を得て経験を過ごすと、その役割とか、世の中とのつながりの中で、私って外から見た時にどういう風な人間と思われてるとか、どういう役割果たさなければならないかっていうちょっと固まってくる部分があるんですよね。社会人になって 20 年以上超えて、いや、こうじゃない自分って、その可能性は自分の中に今日だってたくさんあるのに、まあ選ばなかった自分ってあると、そういう性格にならなかった自分とかそういう役割を選ばなかった自分っていっぱいいて。でもお芝居だったら短期間かもしれないけれども、違う人生を生きられるかもしれないと。それでお芝居を急にしたくなったんです。

この語りから、なおこさんは自身の社会的役割が固定された現状に対して、自分の新たな可能性を広げるために演劇を始めたことがわかる。

ゆきさん）
仕事してるんですけど、普通に、仕事終わったら家に帰るっていうふうに、正直、それだけの生活を今までしてて。やっぱそういう日々を過ごしてると、もうちょっと他のこともしたいなみたいな欲が出てきて、でいろいろ習い事始めようかなと調べてまして、その中に劇を見るのが好きだから、ちょっと体験できそうなやつあるんかなって思っていろいろ調べてみて、でこの劇団 X にあったっていう流れがあります。

この語りから、ゆきさんは仕事と家庭のみの生活を充実させるために習い事として演劇をはじめていることがわかる。

堀川）
なんで今このタイミングでってなったんですか？
さえさん）
今このタイミングでっていうのは仕事が嫌になってきたからっていうのはすごいあります。

さえさんは、なぜこのタイミングで劇団 X に入団したのかという問いに対して、「仕事が嫌になってきたから」だと語っている。
以上３名は、入団時に社会人だった人である。３名とも仕事との関連性を語っていることから、社会人が習い事をはじめる理由の１つには、仕事と家庭のみの生活で固定された役割に対して不満や物足りなさを感じているからということが考えられる。

(3)　人間関係型
人間関係型とは、人との交流において、適切なコミュニケーション力を身につけるために演劇をはじめた人である。人間関係型には、さえさん、ゆきさん、ゆうこさんが当てはまる。

さえさん）
演劇は見たことないけど、映画とかドラマとかでよく突っ込むじゃないですか、あまりにも演技が不自然だったりとかしたら、おかしいやろって思うじゃないですか。見てる側が思うだけでやってる側は実際どんな感じでやってるんだろうっていうのを知ってみたくてっていうのが

きっかけ。

これより、さえさんは、役者の演じ方と役者の感情といった役者の感覚を理解するために演劇をはじめたとわかる。また、演技に対する「おかしいやろ」という語りからは、さえさんは、いい芝居の判断基準を欲しているとも考えられる。これに関して、以下の語りを参照して考察したい。

堀川）
仕事辞めようと思ってたのは前々から思ってたんですか？
さえさん）
なんかずっと。あ、私が全部いけないんですけど。あ、でもこれ以上続けられないっていうのがほんとに、劇団Ｘをはじめた頃。（中略）私の隣の席が上司なんですよ。すごいやりにくいから、で今日は何怒られるんだろうみたいな。今日は何怒られるんやろうみたいな、もうこれやってたら怒られるかな、これやってたらちゃんと、なんやろ、普通の眼差しで見てくれるんかなとか。もうそういうことを考えながらやってるのももう辛かったっていうか、もう嫌やったし。いい関係を取り戻すのは無理なんだろうなあって思ってました。

これは、インタビューの後半で、仕事を辞めた経緯について、さえさんが語った場面である。この語りから、さえさんは職場で健全なコミュニケーションをとれていなかったことがわかる。特に「これやってたらちゃんと、なんやろ、普通の眼差しで見てくれるんかな」という語りからは、さえさんが職場で適切な返答を考えていたことが読み取れる。このさえさんの職場での環境と、演技が不自然な場面は、円滑なコミュニケーションが行われていないという点で似た状況である。つまり、さえさんは、現実での不自然なコミュニケーションを改善するために、演劇を通して適切なコミュニケーションを知ろうとしたと考えられる。

ゆきさん）
自分結構人見知り激しいし、コミュニケーションも苦手やから、稽古して発表してっていうその工程踏んだら、もうちょっと改善されるかなみたいな期待もあって。だから劇やってみようかなみたいな。

この語りから、ゆきさんは自身の人見知りやコミュニケーションを改善したいという思いで演劇をはじめたことがわかる。

ゆうこさん）
演劇をやりたかったわけじゃないんですけれども、自分は専業主婦をやってきたので、ちょっと何年後かには社会に出たいと考えていました。で、その社会に出たときに、やはり日頃からあのいろんな人と接する機会がまずなかったので、ちょっと社会性というものが不安に思ったのと、あと、やっぱりあの声も全然出したりはしないので、できれば食べることが好きなので、接客の飲食の仕事場で働きたいなと思っていたので、まずその社会性を身につけたいと考えました。

この語りから、ゆうこさんは仕事を始めるための準備として、社会性を高めるために演劇をはじ

めたことがわかる。

以上３名は、それぞれ具体的な状況は異なりつつも、適切なコミュニケーションに対して不安があるという点で一致している。そのため、この３名は、人との交流において、適切なコミュニケーション力を身につけるために演劇をはじめた人であると考えられる。

以上、(1) から (3) の分類を通して、参加者の入団動機をみてきた。それぞれの型で演劇に求める役割は異なっているが、現状に対して何かネガティブな思いをもっており、それを演劇で打破しようと試みている点は参加者全員に共通している点だと考えられる。

4．1．2．現在の動機

参加者の現在（11 月時点）の演劇を続ける動機を整理すると、(4) 演劇型、(5) 交流型に分類できる。[2]しかし、すべての参加者が (1) から (3) の分類から (4) (5) の分類に完全に移行したわけではなく、前者に後者が追加された場合もある。

表 3．現在（11 月時点）の継続動機

演劇型	なおこさん、ゆきさん、としさん
交流型	さえさん、ゆうこさん

(4)　演劇型

演劇型とは、演劇自体を目的にした人である。演劇型には、なおこさん、ゆきさん、としさんが当てはまる。

なおこさん)
今回の公演に手を挙げた理由は前回の公演に向けての最後の２ヶ月が楽しくてしかたがなかったというのが一番大きいです。でこれがこのまま終わってしまうのがそのせっかく初めてからやってみんなと何かを作り上げた。ここまで来て高まって、(中略) それが終わった。はい解散なんですけど、それも決まってることなんですけれど、ここまでゴーンってやって、それでもう終わってしまうっていうのが自分の中で、ちょっともったいなかった。これ続けたらまたその先、自分の中で、その先まだ出会ってない自分と会えるのかなと思ったので、続けたですね。

この語りから、なおこさんの継続理由は、演劇をさらに極めるためだとわかる。

堀川)
始める前の目的として、コミュニケーション能力高めたかったりとか、人見知り直したいなとかの目的があったわけやん。そういう目的って変わらず、今もそれが原動力っていう感じなのかな。
ゆきさん)
まあそうやな。公演を成功させるっていうのが今の第一目標やろうけど。根本的な目的はそうかな。だってなかったら別に行く必要はないし、劇団じゃなくてもいいし。

[2] かえでさんは６月末で退団したため、今回の分類には含まれていない。

この語りから、ゆきさんは入団当初の解放型、人間関係型の動機を保ちつつも、卒業公演の成功のためという目的が追加されたことがわかる。

堀川）
劇団Ｘに入る前になんで劇団Ｘに入ったかっていうことで、人と話すこととか、主張することとかの練習をしたいみたいな、できるようになりたいみたいなことさっきおっしゃってたと思うんですけど、今練習を続けてる理由というか、原動力みたいなのは変わったりしましたか？
としさん）
今すごい変わってきてて、自分はもともと自分を主張できるようになりたいっていうのだったんですけど、最近では、自分が舞台に立っているところを見てもらいたいって変わってきてて。最初は自分の意見を伝えるとかが目標だったんですけど、最近は舞台に立てることがすごくモチベーションにつながってて、だからだいぶ最初とはすごく変わったと自分でも思ってます。

この語りから、としさんは自己表現型から演劇の舞台自体を目的とした演劇型に変化したことがわかる。
以上３名は、入団時の演劇を手段として捉えた動機ではなく、演劇自体を目的とした動機を持つように変化していると考えられる。

（5）　交流型
交流型とは、劇団の他の参加者との交流を目的にした人である。交流型には、さえさん、ゆうこさんが当てはまる。

堀川）
４月から始めて今も頑張って続けてるじゃないですか？それって何を原動力に続けてるのかなみたいなのをちょっと。
さえさん）
でも、やっぱり、楽しいですよね。演技、その稽古がってのもあるけれど、こうやってみんなでわいわい楽しくできるのが楽しいですよね。

この語りから、さえさんは他の参加者との交流自体を楽しんでいることがわかる。

堀川コメント）
「劇団Ｘ」に入団する前と今では、稽古に対するモチベーションの理由に変化はありますか？
ゆうこさんコメント）
モチベーションの理由変化はありました。
色々な人達と接する事で毎回、勉強になります。エネルギーをもらえるし、みんなで同じ目標に向かって歩いていく人の姿勢、協力していく気持ちが一人一人あるので居心地が良くて毎週、参加させていただくのが楽しみです。皆の足でまといにならないように色々な事頑張りたいなぁと思って刺激をうけています。

この語りから、ゆうこさんは他の参加者との交流を「居心地が良」いと感じていることがわかる。また、「エネルギーももらえるし」という語りからは、ゆうこさんは交流を通して演劇の原動力を得ていると考えられる。

以上２名は、他の参加者との交流に楽しみを見いだし、モチベーションとしている人である。

これより、参加者の演劇に取り組む現在の動機を整理すると、演劇型、交流型に分類することができることが明らかになった。しかし、この変化は完全に動機が移り変わっていることを示すわけではなく、元の動機に加えられる場合もある。

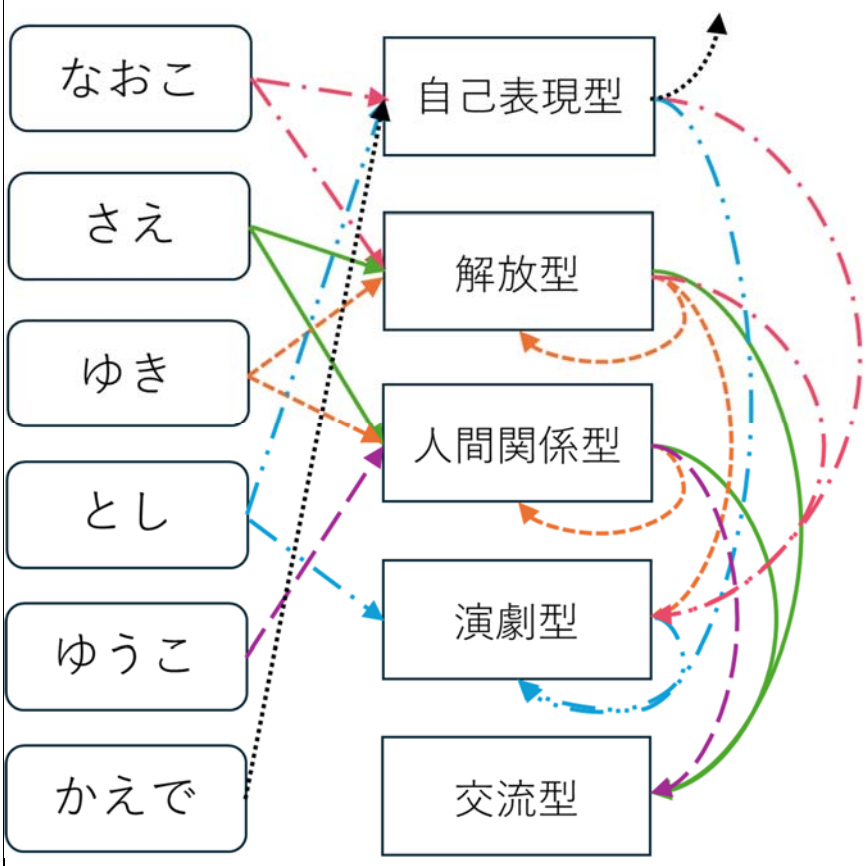

図１．動機の変化の様子

以上の一節での考察より、参加者の入団動機と現在の動機は、５つの型に分類できることが明らかになった。また、入団当時は現状に対するネガティブな思いを打破する手段として演劇を捉える参加者が多く、その後、劇団の空間内でのポジティブな効用を求めて演劇に取り組むように変化する傾向があると考えられる。

この変化をまとめたものが、図１である。

5．2．　稽古の過程と参加者の関係

劇団Ｘでは、はじめの 2~3 ヶ月間基礎稽古を行う。基礎稽古では、発声、歩行の練習、身体の動きのみで状況や役を表現するポーディング等を学ぶ。ここでは入団した人が次々と参加し、稽古を積んだ人が次々と公演チームに移る。そのため、同じ稽古に参加しているからという理由で、全員が友人関係になることはなく、同時期に入団した少人数の集団が複数存在する状態になっている。

次のステップは公演稽古で、ここではじめて公演チームと呼ばれる集団が形成される。このチームで一緒になると、卒業公演までの 8~10 ヶ月間ともに稽古に励み本番を迎えることとなる。公演チームには、基礎稽古からの参加者に加えて、劇団Ｘのリピーターが合流する。リピーターは、劇団Ｘの他のチームで、すでに卒業公演を終えた人、もしくはもう少しで終える人のことを指す。

15 人程度のチーム全体を集団にするため、公演チームでは交流会が行われる。また、卒業公演に対する理解を深めるために、参加者全員が先に公演を行うチームの裏方を体験する。

5．3．参加者の行動・思考の変容

5．3．1．演劇外での変化

参加者へのインタビューから、劇団に入団する前よりも現在の方が、参加者は外向的な思考や行動をするようになっていることが明らかになった。

外向的な思考に関して、人への興味が深まったと語っているのは、なおこさん、ゆきさん、かえでさんの３名である。

なおこさん）
自分でちょっと難しかったキャラクターをするにあたり理解を徹底的に深めるっていうことはすごい人間としての勉強にもなって、（中略）なんでこの人こんなことを言うのかなとこんなことするのかなってわからなかったとしても、お芝居をやった後はどうしてこの人ってこうなんだろうって一生そのなんか話した裏側とかをこう観察したり考えたり、なるべくポジティブによりポジティブにこう深く理解したいなって。（中略）なんかお芝居を通じていろんな人間を知ることは、実生活においてもね。結局はなんか目の前にいる人とか、周りにいる人をよりもっと深く知りたいなって思う目線ができたというか、視点ができたとか、そのきっかけになったので、非常に自分にとってプラスになっています。

ゆきさん）
劇団員の人が、人を観察するのが大事みたいなことを言ってて、あ、確かにと思って人のこと観察するようになりました。いや、別にじろじろ見てるわけじゃなくて、あ、こういうことをしてるけど、なんでやろうみたいな背景みたいなを考える癖みたいなのは結構ついたかなと思います。

かえでさん）
性格面では、初対面の人相手に積極的に話しかけるようになったとか、初対面の人を含め、他人に対してすごく興味を持つようになったなと思います。（中略）初対面の人って、ありきたりな話ばっかりしがちじゃない、っていうか当たり障りのない話ばっかり。そこじゃなくて、もう一歩踏み込んだところの、その人の中身を知りたいなって思うことがすごく増えて。

これより、以上３名は、他者の行動や考え方を表面的な理解にとどめず、その背景まで理解しようとしていることがわかる。なおこさんは役の理解を深める中で、ゆきさんは劇団員の声掛けで、実生活での人に対する興味を深めていることから、この変化は、演劇の稽古を通して起こったものだと考えられる。かえでさんは、この変化の原因については語っていないため、劇団のどの活動が影響したのかは定かではないが、入団前後で人への興味が深まったことは明らかである。

外向的な行動については、としさん、かえでさん、さえさんが語っている。

としさん）
日常の会話とかにも一緒で、すごい人に伝わるように話するのを頑張ってるって感じです。
堀川）
もともとは友達と話すのとかって結構苦手だったんですか？
としさん）

苦手というよりかは、むしろ好きなんですけど。（中略）自分、ある時から緊張してしまって、喋ることに。そこから自分はどういう風にしゃべったかなとか、すごい気にするようになったから、喋るのがちょっと億劫になっちゃって、喋ることはすごい、話すことはすごい好きなんですけど。
堀川）
じゃあ今はその緊張みたいなのが減ってるって感じなんですか？
としさん）
そうですね。はい、だんだん減ってってはいると思います。

かえでさん）
行動面の変化でいうと、人前で発表する機会っていうのに自ら手を挙げたりすることが増えました。
（中略）
かえでさん）
私、本当に人前で発表するのマジで苦手やったんわかるかな？ しってたそれ？
堀川）
人前で発表するの苦手ってやつ？でもあんま得意なイメージは持ってないかも。
かえでさん）
本当にひどくって高２の時とか、マジで国語の授業の音読で、音読が回ってきた時に、１ページぐらい読んで後半声が震えて、息がうまく吸えないとか。そのレベルでマジで苦手やって。
（中略）（大学の：筆者補足）英語の授業で７月の半ばぐらいに発表があって、その時に私、自分のパートを読んだけど、そこでね、一切緊張せずに話せたっていう。

以上２名は、入団以前に人と話す場面や、発表の場面で強い緊張を感じていたという。それが現在は改善され、より自然体で人とコミュニケーションをとれるようになっていることがわかる。

さえさん）
あ、でも行動力は増えたかもしれないです。劇団Ｘ始めるっていうことが、一番大きなきっかけだったんですけど、もうどうせお金かかるからっていうことで、もういいやっておもってたことをお金がかかってもいいからやろうって考えにできるようになったかな。外出とか。別に１人でどっか行くやったら部屋におっても一緒じゃないんみたいな、そういう感じかな。
堀川）
じゃあ結構遊びに行ったりとかしましたどっか？
さえさん）
そうだな、１人で遊びに行ったのはないかな。でも温泉施設とかには１人で行くことあります。
堀川）
前はあんま行かなかったんですか？
さえさん）
憧れの場所としてあったから、自分では立ち入れない場所的な。そこは人と行くべきとこやからみたいなかんじが自分の中の固定観念としてあって、でも別にいいんだって思えるようになったかな。

このさえさんの語りから、入団以前のさえさんは、自分１人のために行動をすることに対して消極的だったことがわかる。現在は、「人と行くべきとこ」であるという固定観念が薄れたことで１人でも行動できるようになっている。

これらの語りから、以上３名は、入団以前と現在を比べると、外向的な行動に対する心理的なハードルが下がったことによって、何かに挑戦できるようになっている。この変化は、稽古で自分の演技を他者にみられ、それに対して肯定的なフィードバックをもらう経験を通して起こったものだと考えられる。実際に、稽古中の劇団員は、参加者の演技に対して否定することなく、それも１つの表現として肯定する声掛けをしている。その声掛けが、参加者の考え方をより柔軟にし、自身の行動に対する緊張を弱めることに繋がってると考える。

このように参加者の語りをみると、演劇の活動を通して、参加者はより外向的な振る舞いをするようになっていることがわかった。これは、より良い演技のための他者の観察や、演技に対する他者の肯定的なフィードバックによって起こったと考えられる。

5．3．2．演劇内での変化

公演稽古に移動すると、参加者には台本が配られ、徐々に本格的な稽古になる。初めの１ヶ月は役を決めず、挙手制で演じたい役をその都度決め、台本を読んで全体の内容を確認する。その後、役決めが行われ、台本読み、立ち稽古、舞台稽古と本番に向かっていく。

初参加者は台本確認で、はじめて本格的なセリフ読みの稽古を行うことになる。基礎稽古で歩行や発声練習、ポーディングを通して身体を自由に動かす練習はしてきたが、発声しつつポーディングを行うことには慣れておらず、セリフが棒読みで、声が小さい、身体が動いていないといった様子が見られた。(2024/8/4 フィールドノーツより)

しかし、リピーターは台本確認の時、舞台の遠くまで響く太い声で大きな動きで演じていた。特に、以前の舞台で自身が演じた役であれば、ほとんど台本を読まずに５メートルほどの空間を使って演じていた。(2024/9/11 フィールドノーツより)

明らかに違う演じ方をみて、初参加者はリピーターに対して以下のように語っている。

稽古終わりの帰り道にて
堀川「2 人（リピーター）やばかったね。」
ゆきさん「〇〇さん（リピーター)、めっちゃ怒ってたな、あのシーン。あれあんな怒鳴りあうシーンなんやな。そんな熱量高いシーンなんかな…。」
(2024/9/11 フィールドノーツより)

これから、初参加者のゆきさんは、リピーターの演技に対して驚くとともに新たな演じ方の可能性を見いだしていることがわかる。

その後、ゆきさんはここで言及している怒るシーンのある役を演じることとなる。初めは棒読みの演技が目立ったが、次第にセリフに抑揚がつくようになり、軽く動きを入れられるようになっている。(2024/10/27 フィールドノーツより)

他にも、インタビューで初参加者に演劇に関することでできるようになったことを尋ねると、以下のような語りがみられた。

堀川）
演劇の中で新たに身についたことってある？演劇に関することで。
ゆきさん）
途中やからなんともって感じやけど、自己表現かなやっぱり。最初の基礎トレ（基礎稽古）でポーディングがあったやんか。正直そこのために行ってたみたいなとこはあるけど、ほんまに楽しくて、やっぱそんな日常生活を送っててそんなこれはこれやっていって、自分が好きなように動いてリアクションを取るみたいなそんな経験あんまりないやん。まあ友達としゃべってたとしても、そんなオーバーリアクションとかはしないから、それやってあすごい楽しいな。ていうか、いつもしないような感情を表現できるなみたいのをすごい感じてたかな。
堀川）
ポーディングって、最初に比べて最後らへんとかできるようになってた感覚あった？
ゆきさん）
最初やっぱ、周りの人も一緒にするけど、人目が気になるというか。え、これ言われてるのと合ってるんかなみたいな不安っていうのあったけど、なんか最後の方はなんかもうあもうこれやもう自分はこうやねんみたいな感じで、好き勝手やってたから楽しかったかな。

この語りから、ゆきさんは基礎稽古のポーディングを通して、以前に比べて自己表現ができるようになったと感じている。

他に、演劇の技術的な要素に言及した参加者はかえでさんとゆうこさん、としさんの３名である。かえでさん、ゆうこさんは、舞台用の声が出せるようになったこと、歩行の姿勢が良くなったことを挙げていた。としさんは発声練習を通してはっきりと話せるようになったという。

加えて、としさんは演劇に対する自身の姿勢にも変化があったと語っている。

堀川）
実際に劇団Ｘの練習入って多分８ヶ月ぐらいになると思うんですけど、どうですか？演劇内での成長というか、練習の中で自分こういうことできるようになったなと思うことありますか？
としさん）
あります。すごくそれを感じてて、始める前までの自分とはすごい結構ハキハキ喋るようになったし、あとは、積極性みたいなものがすごい出てきたと思ってて、っていうのはいろいろこれから本番に向けて頑張っていく感じの中で、自分にできることは何かっていうのをすごい考えるようになれたかなっていうふうに思います。

以上の語りから、としさんは稽古を通して劇団の活動に対して「積極性みたいなものがすごい出てきた」ことがわかる。これらの語りから、としさんは次第に演劇自体に魅了され、技術、意欲ともに高まりつつある状態だと考えられる。稽古に対する姿勢の変化は、他の参加者からの語りからもみられた。

ゆきさん）
経験者の人もそうやけど、みんな熱入ってんなみたいなんはいつも感じる。ぼーっとしてる感じの人もおるけど、いざ台本読むとすごい熱が入って、セリフを読んでるとか見るとなるほどとかすごいなあみたいな感心してるかな。

ゆきさんは、稽古中の他の参加者の様子をみて、練習に対する熱の入り方が以前とは違うと感じているようだ。

なおこさんは、以前所属していた公演チームの変化についてこのように語っている。

なおこさん）
お芝居をみんなで作り上げていくっていうプロセスを経て、だんだんそのチームの中でかもしれないんですけれども、自分なりの個性を出していくとか、伝えていくとかっていうのがどんどん活発になってて、自然に引き出されてくる部分もあるし、周りの人に刺激されてもっと頑張ろうと思って、もっと自分をこういう風に出していこうっていうふうになる人もいるし、その中にお芝居を組み立てる中で、みんな進化してくるんですよね。（中略）舞台の日が決まっちゃったりすると必死になるんですよね。最後１ヶ月、１ヶ月半とか、そこのみんなのそのまあ期限が決まっている中でのダイナミックなお互いの成長ぶりってすごいですよ。（中略）あ、前回も、あ、これってどうなるんだろうとか思ってても、最終的にはもうみんな期限が決まっているものなので、一気にぐーんとみんなの中でこう盛り上がって、もっとこうしようみたいなのが出てきて、そこの瞬間、それが出てきた瞬間多分、みんなそれぞれ成長したり、乗り越えたりするんだろうなと思います。

なおこさんの以前の経験を踏まえると、参加者の卒業公演への熱意が高まってくると、最終期にかけてそれぞれの演劇の成長速度が加速することがわかる。成長が加速する理由には、卒業公演に近づくにつれて、参加者の稽古への没頭の度合いが深まるからだと推測できる。また、本番に近い稽古が行われるようになることも影響していると考える。ここでの本番に近い稽古とは、小道具を使い、場面ごとに演技を止めずに行うような稽古のことを指す。現在の公演チームは 11 月時点で公演まで２ヶ月以上残した状態である。そのため、熱意の高まりは見えるが、それが演劇の成長にはまだ結びついていない状態であることが考えられる。

一方で、参加者の中にはすでに大きく演技に変化があった人もいる。さえさんははじめ、初参加者の中でも特に声が小さく、セリフも棒読みでどのように演じたら良いのかわからない様子が見られた。しかし、さえさんは台本読みを経て以前とは違う演じ方をするようになった。

台本読みの時、フィードバックにて
劇団員あおさん「さえさん、前に比べて声が出るようになったね。はっきり言えるようになってる。いいね。」

（2024/9/22 フィールドノーツより）

さえさんの変化は劇団員からみても明らかであり、ポジティブなフィードバックがなされていた。他の参加者の場合、このような劇団員からのポジティブなフィードバックに対しては、素直に受け止め、自身の成長を楽しんでいる様子が見られた。ただし、さえさんについては以下に述べるように、この変化に対して異なった認識をもっていた。

5．4．　劇団員と参加者の認識のずれ

演じ方に変化が生じたさえさんに対して劇団員のあおさんは以下のように語っている。

劇団員）
本番間際になってお芝居がだんだん佳境になってくると、基礎稽古でやってた部分がうまく出るようになってくるので、そうするとなんかこの人の個性がどんどん出てきたなと思って。例えば同じチームでわかりやすく言えば、さえさんとか。（中略）すごく最初はちっちゃくて蚊の鳴くような声で。本当はすごく明るくてのびのびとした感性を私はさえさんに見てるんだけど、どうやって出していいかわからないなみたいなところがあったので、まず声を出したり大きな動きをすることによって、多分元々持っているすごいのびのびとした感性が出てくるんじゃないかなと思ったら、最近ちょっとずつ声も出てきて、いいなって思ったり。

あおさんは、さえさんの変化はその人の個性がでてきた結果であると捉えている。しかし、さえさん本人はこの変化を以下のように語る。

堀川）
どうですか？最初に比べてできるようになったなとかあります？
さえさん）
最初に比べて。いや、まだね、何もないです。まだまだ何もできてないな。
堀川）
あおさんとかに言われてません？声出るようになったよっていうか。
さえさん）
それはだからそう、今までふわふわしてたじゃないですか？本読みもあの次、この人をこれ誰が読んでみたいなふわふわしてたけど、もうこれで固定されてしまったらそれしかしないできない。たぶんそこでやっとなんか。
堀川）
実感を持ってそうやれてるみたいな。なんかできるようになったっていうよりかは、
さえさん）
その環境がそうしてくれた。

ここで、さえさんのいう「ふわふわしていた」という状況は、台本確認で役を決めずに読み合わせをしていたときを指している。また「固定」は、配役がされたという意味である。さえさんは、自身の変化に対して、個性が出せるようになったわけではなく、配役されたことで演じ方の幅が狭まり、そうするしかなかったから起こったことだと感じているようだ。
しかし、さえさんの変化は、役決めがされる少し前から見られたものである。その点について、改めてさえさんに尋ねた。

堀川）
そうなんですか？でも本読みの時も言われてましたよ。多分固定されてない段階で。
さえさん）
だから大きい声出したら下手になるっていうのは自分の中であったから、そのバランス取れなくてちょっと難しかったんですよ。みんなうまいから、本当に上手やから、自分も上手にしなきゃ上手にしなきゃって思ったら、やっぱり声ってちっちゃくなってしまってみたいな感じ

で。

この語りから、さえさんは「大きい声出したら下手になる」という演技に対する不安から、自身の上達を感じないと語っていると考えられる。

なぜこの不安はさえさんのみに生じているのか。理由はさえさんの持つ演劇に対する理想像にあると考える。以下は、劇団Ｘの稽古の感想を尋ねたものである。

堀川）
実際やってみてどうですか？難しさ知ったりとかしましたか？
さえさん）
難しいなって思いました。先週の本番を見た時も、やっぱり声の大きさと演技の重さってすごいバランスとるの難しいなって思ってて、声出せば出すほど、心って入りづらいんじゃないかなって思って。心持てば持つほど、声って静かになっていくんじゃないかなっていうのはすごい思って。

この語りから、やはりさえさんは、繊細な感情を表現するために声を小さくする必要があると強く思っている様子がうかがえる。

さえさんの演劇に対する認識と実際の演劇に差があるのは、さえさんの認識が映像作品を元につくられたものだからだと考えられる。劇団Ｘ入団前、さえさんは演劇を鑑賞することは全くなく、映画やドラマといった映像作品を鑑賞していたという。舞台演劇では、悲しみを表現したセリフでも、客席の奥まで届く声の大きさで演じる必要がある一方で、映像作品はいかにリアリティがあるかという点が重要視され、悲しいセリフは小さい声で繊細に演じられている。

これより、さえさんが演劇でできるようになったことはないと語るのは、さえさんの映像演劇からつくられた演劇のイメージと、舞台演劇の実態が乖離しているからだと考えられる。

加えて、実生活と舞台演劇の実態が乖離していることも、さえさんが自身の変化を感じていないと語る理由だと考える。職場での人間関係に悩みを抱え、適切なコミュニケーションを知るために演劇をはじめたさえさんにとって、舞台演劇の非現実的な演じ方を習得することよりも、映像作品の現実的な演じ方を習得することの方が、さえさんの求めているものに近い可能性がある。

5．5．　インタビューによる意味づけの可能性

ここまで参加者のインタビューから、演劇を通した参加者の行動や思考の変化をみてきた。ただし、ここにはインタビューによる変容が含まれる可能性がある点に留意しなければならない。以下は、としさんに劇団員とのやりとりについてふりかえってもらった場面である。

堀川）
あおさんとか、〇〇さんとかの劇団員の方から言われたことで覚えていることとかありますか？印象的だったこととか。
としさん）
今覚えてるのは、あおさんですかね。あおさんに、練習終わった後に、僕は誰かがいて、受ける演技がすごいよかったっていうふうに言ってもらったことがあって（中略）あおさん曰く、

自分は誰が言ったことに対してそれを返すのがすごい上手だから、受ける演技がいいんだよみたいなことを言ってもらって、それはすごい今めっちゃ覚えてる。
堀川）
だからかもですね。人が言ったことに対してどう返そうかみたいなことを最近考えて話してるみたいにおっしゃってたと思うんですけど、そういうとこも関係してるのかなとかこう勝手に思ったりしました。
としさん）
そうですね。今、自分でも言ってて整理されてきました。多分そうじゃないかと自分でも思います。

としさんの「自分でも言ってて整理されてきました。多分そうじゃないかと自分でも思います」という語りから、としさんはインタビューでの会話を通して、劇団の活動を振り返り、自分の変化に意味づけをしたことが考えられる。つまり、このインタビューがなければ、活動をふりかえる機会がなく、自身が劇団Ｘで得たことを自覚しなかった可能性がある。

同様の場面は他の参加者にもみることができた。本研究の当初の目的は、演劇による人の変容を明らかにすることだったが、より慎重な表現をすれば、実際には演劇とインタビューによる変容を明らかにしたというべきかもしれない。

6. まとめ

本研究の目的は、演劇の活動を通した人々の行動や心理的な変化を明らかにすることであった。劇団Ｘでのフィールドワークから、参加者は、演劇を通して外向的な思考や行動をするようになる傾向があり、参加者の劇団の活動に対する原動力は、現状に対するネガティブな思いを解消するという理由から、劇団の活動でポジティブな影響を受けるためという理由に変化することがわかった。

ただし、本研究では、結果にインタビューで参加者に自身の活動をふりかえってもらったことによる変容が含まれている可能性がある点に留意する必要がある。

また、今回フィールドワークを行った劇団Ｘは、期間限定であるという一般的な劇団とは異なる特徴を持つ劇団である。なお、演劇初心者に注目してインタビューを行ったため、一般的な劇団で長期間演劇を続けている人にも本研究の結果と同様の変容が見られるかについては、今後考察していく必要がある。

参考文献一覧

竹内敏晴（1975）.『ことばが劈かれるとき』.思考の科学社.
平田オリザ・蓮行（2009).『コミュニケーション力を引き出す一演劇ワークショップのすすめ』. PHP 研究所.
蓮行・平田オリザ（2016).『演劇コミュニケーション学』. 日本文教出版.